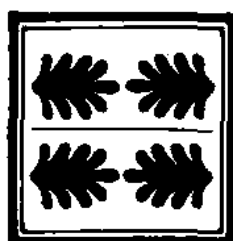


天保凶録

④ 松本清張





講談社文庫

定価360円

てんぼうずろく
天保図録(四)

まつもとせいちょう
松本清張

昭和57年4月15日第1刷発行

発行者 三木 章

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 8-3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 豊国印刷株式会社

印 刷 豊国オフセット株式会社

製 本 株式会社大進堂

© Seicho Matsumoto 1982

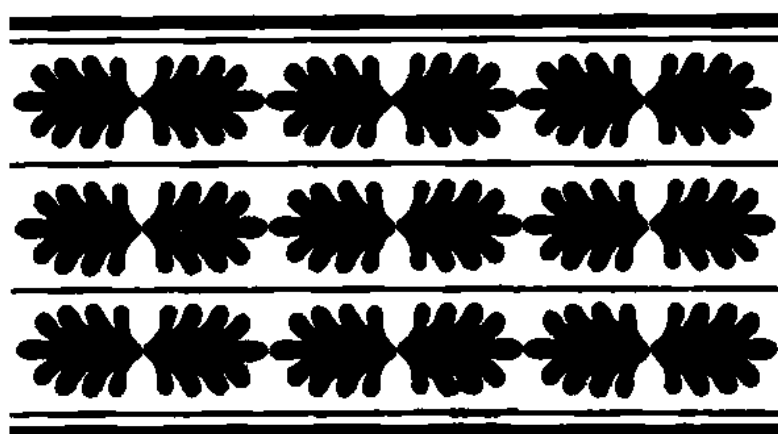
Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送り
ください。送料小社負担にてお取替えします。

講談社文庫

天保図録(四)

松本清張



講談社

目次

お浜御殿	七
了善煩惱	三九
狐狸	八
口走った一句	二四
伝之丞殺し	一四七
野の狐	一八一
駒込の里	二五
駆引	二五七

天保凶録
(四)

お浜御殿

年寄姉小路と紀州家の奥女中山浦とは、山里の庭で会って以来、ひそかな交流が急速に進んだ。

姉小路としては、いま、家慶いえよしとも水野忠邦とも悪い水戸宰相斉昭を動かしたほうがよいのだが、肝心の斉昭は水戸に帰ったまま出府しないので、どうにも手段がない。

在府は尾張と紀州だけだが、尾張の当主はとかく病弱で、はなはだ頼りない。残るのは一家紀州だけである。幸い当主斉順なりよしは健康にも恵まれ、押しも利く。それに、家慶に対してはともかくとして、水野忠邦の急進的な改革方針には批判的な人だ。

斉順に働きかけたいというのが姉小路の考え方だったが、それには山浦から先に持ち込んだ話がちょうど誘い水になった格好である。

そこで、姉小路は何かと忠邦の独断を山浦に言つて聞かせ、それが必ずしも將軍の意志でないこと、また忠邦への信頼が世間の思っているほど強固でもないことを吹聴した。

例の嫩生姜の一件も具体的な傍証として彼女は言い添えた。山浦は話を聞いてびっくりしている。意外だったらしい。

その後、山浦から来た内証の手紙では、

「殿さまに申し上げたところ、おどろいておいでになりました。そして、越前ならばさもあらう、と仰せでした」

とあった。

姉小路は、まず親藩にアンチ水野の雰囲気盛り上げようというのである。さすがに自分の口からは家慶に直接忠邦の批判を言うことはできない。こちらはあくまでも陰に回つて道具立てをしたいのである。こんなところが、身の安泰を守つて、しかも敵に本体をさとられることなく目的を達したいとする御殿女中の特質かもしれない。

しかし、ここに一つの障害があった。

ほかでもない、家慶が愛妾としている於雪の方だ。これは忠邦がわが養女として家慶に差し出した風月堂の娘で、彼女が大奥の内情を逐一忠邦に報告していることは姉小路にもわかつてゐる。

その通報はときたまの宿さがりのときだったり、ほかの女中に託する手紙だったりする。だから、忠邦についてうっかりしたことが家慶に言えないわけである。

また、そういう女が家慶の側にいては忠邦を失脚させることもむずかしくなってくる。その目

的を果たすには於雪の方を家慶の側から離さなければならぬ。

といって落度のない者を辞めさせるわけにはいかぬ。於雪の方は家慶の数ある愛妾の中でもわりと気に入られている中臈だった。そんな女の悪口をうっかりと姉小路が言い出そうものなら、逆効果ともなりかねない。

姉小路は、於雪の方が内偵した大奥の模様を忠邦に報^しらせる証拠を抑えようかと思ったが、現在の段階ではそんなことをしてもあまり効果がないとわかった。忠邦は家慶にいちおう信任されているし、万事、この將軍から施政のいっさいを任されているからである。台閣には忠邦に手向かう反対派がないわけだった。そのような策略は強力な対立派があつてこそ効き目があるが、忠邦の独裁内閣ではこれも危ないことだった。

また、忠邦にしても大奥と自分をつなぐ強力なパイプが於雪の方だから、もし、変な策動を姉小路あたりがすると、容赦なく姉小路を追放するに決まっていた。

（何かいい工夫はないか）

近ごろの姉小路は、そんなことばかり考えている。自然と気分も重たくなり、冴えない顔色になつてゐる。

それが部屋子の眼には異常に映つたのであろう。その中の一人が、あるとき、こんなことを言い出した。

「旦那さま、近ごろ、御気色がすぐれぬように見受けますが、どこぞ具合でも悪いのではございませぬか？」

「いや、べつに悪いところはないが、なんとなく気が晴れぬのじゃ」

姉小路はこめかみを白い指で揉みながら言った。

「それはいけませぬ。近ごろ、急に暑さもひどくなり、何かと身体の調子が違っております。お食事もありすすみませぬが、きつと暑氣がお身体の毒になっているのでございましょう」

「まこと、近ごろの暑さはきついもう」

姉小路は調子を合わせた。

「旦那さま、涼しい所にお出かけあそばしてはいかがでございますか？」

部屋子は主人を心配してすすめた。

「涼しい所と申しても勤めの身、そう気ままなことは許されませぬ」

「いいえ、そうではございませぬ。旦那さまから上さまにおすすめして、お浜御殿あたりにお出かけあそばされるようになされたいかがでございましょう？　さすれば、そのお供の中に旦那さまもおはいりになることではあり、よい保養となるかと存じます」

「お浜御殿のう……」

姉小路は、二、三度行ったことのある、大川に面した広大な庭を思い泛べた。まことにあの場所なら涼しそうである。

すると、姉小路には一つの期待が生まれた。於雪の方を貶すあらゆる途が塞がれている今、家慶のお供に於雪の方を加え、お浜御殿に行ったなら、お城の中と違い女中たちは遊山気分になるので、あるいはそこで於雪の方の迂濶な落度を見つけることができるかもしれない。計画というよりも偶然に頼る期待だが、何もしないで手をこまぬいているよりもはるかにましだった。

「まこと、そのほうの言うようにお浜御殿は涼しいであろう。上さまにおすすめしてみようか」

の」

彼女は相手の顔よりも、大奥のどこかにいる於雪の方を眼に泛べてこつくりとうなずいた。

姉小路は、このことを家慶の侍妾であるお定さだの方かたにまずすすめた。自分の口から直接言うよりも、有力な侍妾から話を持っていったほうがいいと考えたからだ。

数あるお手付中臈の中でもお定の方は、三年前に達姫たつひめを生んでいる。この女ははじめお久ひさとって西の丸でお次の役をしていたとき家慶の手が付いたのだ。同じ侍妾でも子供を生んだと生まないのでは、その地位が天地ほど違う。どのように家慶に愛かかわされても、子供のない女は御生母でないから、だいぶん低く見られる。家慶の愛情の厚薄には関かかわらない。

お定の方は姉小路から話を聞いて、

「それはよい思いつきじゃ」と賛成した。

「近ごろの暑さでは広いお城の中でものがれる場所がないくらいじゃ。夜なども、いつまでもむしむしして寝苦しいことじゃ」

と、彼女もだいぶん暑氣当たり気味だった。

「つきましては、お浜御殿にお成りを願うとき、ほかの中臈方もできるだけ多くお供を願えれば仕合わせでございますが」

姉小路は持ちかけた。

「暑いのは誰も同じこと。それに、涼しい場所を恋うのは人情じゃ。幸い御殿から浜辺に船を出

して夕涼みするのも一興じゃな」

と、たいそう乗気になった。

お定の方から家慶に話が渡り、家慶の同意があつたらしい。四、五日すると、明後日は早くから將軍家がお浜御殿にお成りということになった。中藤衆もほとんどが参加というかたちになった。もとより、於雪の方もその中に加えられている。姉小路は大奥の総取締だから同じくお供をする。

姉小路の作戦はこうだ。

当日は、大奥と違って中藤たちが全部一堂に顔を合わせる。序列はあるが、家慶を中心に女心の見えない暗闘がくりひろげられることは必定であつた。大奥の中だと中藤衆もそれぞれに部屋を賜っているので、めつたに顔を合わせることはない。それぞれが孤立状態である。しかし今度の場合は嫌でも共に行動をしなければならぬ。それに、春の花見、秋の紅葉狩りと同じく一種のレクリエーションであるから、どうしても解放的な気分になる。そのへんになんらかの落度が於雪の方に見いだされはしないか。

しかし、これは企まれた計画ではないので、果たしてそのとおり都合よくいくかどうかわからない。姉小路の希望は、いわば可能性であつた。

——当日となった。

將軍がお浜御殿お成りとなると、警備もたいそうなものだ。このお成道なりみちというのは、御広敷御門を出て、平河ひらがわ口御門を通り、酒井雅楽頭さかいうたかみ屋敷脇から辰ノ口、戸田采女正屋敷とだうねめいしやう前を通る。この辺

は大名小路で、現在の丸の内である。永井日向守屋敷脇から数寄屋橋御門を左に行き、本数寄屋町を右へ尾張町二丁目に出る。

木挽町五丁目橋から右へ逸れ、木挽町裏通りを行き、柳生但馬守屋敷前より奥平大膳大夫屋敷前を通過し、浜大手御門に到着するのである。

この沿道の警衛は、南北両町奉行の手付はもとより、幕府直属の役人が固めるほか、譜代大名の家臣が、駆り出される。

そのほか、御殿の両脇を流れる築地川、汐留川、また前面にひらいた海は、御船手奉行向井将監手付の警備船で固められる。当日は、たとえ切手を持っている船でも一般の水行を禁じた。

家慶の乗物の次に中臈方がつづく。大勢の侍妾や女中のお供だから、なかなかの壮観だった。

巳の刻（午前十時）に出門した一行は、午の刻（正午）前によく浜御殿の大手門にさしかかった。ここには浜御殿奉行が出迎えている。

浜御殿というのは、はじめ、四代將軍徳川家綱が、のちに綱重となった長松のために下屋敷として与えた。綱重の子綱豊が綱吉のあとを継いで西の丸にはいったので、爾来、西の丸御用屋敷と呼ばれたのを、のちに浜御殿と改められたという。

御殿の広さは五万八千坪。江戸湾に向かつていて、その邸内の結構は、築山あり、池泉あり、木立あり、松林あり、木石の配合の妙は、今日の浜離宮の面影を見ても偲ばれる。

邸内にはさまざまな名前をつけた茶屋が配置され、池には鴛鴦や鴨を飼っている。池には大小の島が造られ、大きな島には両岸から橋が架け渡され、橋の影は築山からさしのぞく鶴亀のかたち似た松の枝ぶりなどとともに水面に映って、えもいわれない美しさを現わしている。

家慶はいったん休憩所にはいり、そこから邸内をそぞろ歩くのだが、まだ日中ながら、汐香しおかを含んだ涼しい風が女中たちの面おもてを吹いて蘇生の思いをさせた。

家慶は塩浜しおはまに出た。池をひとめぐりするだけでもかなりの距離である。家慶は塩浜の腰掛にかけて海面を眺めていた。

それまで晴れていた空がだんだんに曇って、あたりもうす暗くなった。このぶんでは夕立でも来そうな具合である。しかし、直射日光が遮さへぎられたためにかえって涼しくなった。

「このぶんでは、ひと雨参るかも存じませぬ。御亭山腰掛ごちやうさんにお移りあそばしてはいかがでございましょう？」

と、お定の方が家慶にすすめた。

一行は塩浜から小高い丘にしつらえられた茶屋に移った。もとより、人工的な丘で、ここを御亭山と呼びなしている。家慶につづいて中藹たちもぞろぞろと従った。雲は厚くなるばかりであつた。

「今日は上さまからお許しが出ている。そちたちも、思うように、その辺を遊ぶがよい」

と、姉小路はお定の方の意を受けて女中たちを解放した。みんなは喜んで三々五々、思い思いの場所に散った。信心深い者は、御殿の中の観音堂や庚申堂こうしんどうに詣る。風流な者は、池中に浮いた島や橋に佇たたずんで一首作ろうとする。泳いでいる鴛鴦に興じている者もある。かと思つと、藤の茶屋、藁葺わらぶきの茶屋などにはいつて、茶を点たてる者もいる。海が好きな者は、まだ塩浜に残つて櫂たきがけで砂などいじっている。

ただし、雲行きが悪いので、舟遊びは中止となっている。

姉小路は、最前からの於雪の方の様子を窺^{うかが}っているが、その於雪の方は、自分の気に入りの女中を連れて、燕^{つばき}の茶屋にさつきからはいつていた。

だいたい、どの中藁もお定の方には一目置いて、なんとなく煙たげだった。生母となると、同じ中藁でも格が上だから、自然と敬遠するのであろう。

それに、家慶の傍にまるで古女房のようにぴたりとくっ付いているお定の方への反撥もあつたかもしれない。そんなことで、家慶の周囲にはお手付の中藁はお定の方のほか二人ぐらいしかいなかった。

お定の方に気に入られている姉小路は、役目もあつて彼女の傍から離れなかった。

肝心の家慶は、久しぶりに歩き回って疲れたとみえ、茶屋の小座敷に身体を横たえて、お定の方に肩を揉ませていた。しかし、ひどく退屈そうだった。彼としては年増のお定の方よりも、もっと若いほかの中藁と遊びたいのだが、やはり子を生んだという手柄の手前、お定の方に遠慮している。このへんは女房に気兼ねしている亭主とほとんど変わらないようだった。それだけに家慶は退屈なのだ。

「上さまのお慰みとして、誰ぞ呼んで余興でもいたさせましょうか？」

と、姉小路はお定の方にささやいた。

「それはよい趣向じゃ。伺ってみましょう」

と、お定の方が家慶に意向を訊いたらしい。

すると、家慶は眠たげな眼をして首を振った。

「だいたい、大奥では芸ごとのできる女を御三の間という役目になっている。これは毎日退屈な大